

Djibouti

[ジブチ]

写真・文 = 玉井 誠子(青年海外協力隊)

追 故
わ 郷
れ を
た 人
人 々



首都ジブチ市の住宅街。石とタン屋根でできた家が多い



夜のジブチ港

ジブチ市の青空コーラン学校。地元の男性が毎朝子どもたちのために開いている



「アッラー・アクバル」(神は偉大なり)。まだ薄暗い早朝5時から、街中にイスラム教の祈禱の呼びかけ、アザーン」が流れ始める。

「アフリカの角」に位置するジブチ。世界で最も暑いといわれるこの国には、近隣のソマリア、エチオピア、アラビア半島から流入した移民の影響で多種多様な民族が共存している。国土の約半分がアデン湾に臨み首都ジブチ市にあるジブチ港

は国の経済を支える貿易拠点。国民の過半数が首都に暮らしているため交通量も多く、街の中心部は出店や人々にぎわっている。

しかし、そこを離れた瞬間、景色は一変する。タン屋根や石で作られた家々が一面に並び、さらに内陸部へ進むと土漠の世界が果てしなく続き、ラクダやロバ、羊、ヤギなどの家畜を世話する遊牧民の暮らしが垣間見える。



ラクダは貴重な荷物運び役である。食用として売られることも



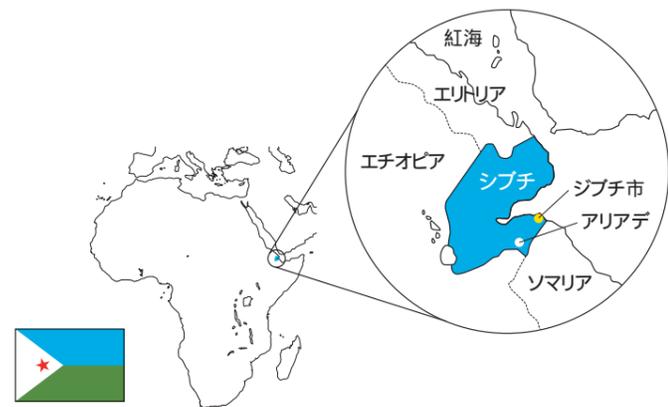
- a. 家がなく路上で暮らす人々も少なくない
- b. 市場の果物屋にて。女性の売り子も多い
- c. ジブチ市の市場兼バスターミナル。常に人と車で溢れ返っている



アリアデ難民キャンプ。小枝などを使った簡単な骨組みにビニールや布をかぶせただけのテントのような家々が立ち並んでいる



アリアデ難民キャンプで母親の胸に抱かれる子。何を思っているのだろうか



首都：ジブチ市
 面積：2万3,200万km²（四国の約1.3倍）
 人口：約82万人（2010年）
 言語：フランス語、ソマリ語、アファール語、アラビア語
 宗教：イスラム教
 1人当たり国民総所得（GNI）：1,270ドル（2009年）
 経路：日本からの直行便はなく、エチオピアやケニアなどでの乗り継ぎが一般的。
 通貨：ジブチ・フラン（DJF） 1DJF = 約0.438円（2012年1月現在）
 気候：熱帯乾燥気候帯に位置し、世界一暑い国の一つといわれる。酷暑が続く6～9月の平均気温は39～50℃で、10～5月でも26～35℃の日々が続く。



キャンプ内の日常。ここに避難してくる人々は日々増加しているという



ふと目に入った洗濯物。幼い子どももたくさん暮らしている



エチオピア難民のハウア。とてもかわいらしい女性で、食後にいただいた砂糖たっぷりのコーヒーはとてもおいしかった

ジブチ市から車で3時間の町アリアデには、主にソマリア、エチオピア、エリトリアから紛争や干ばつを理由に避難してきた人々を受け入れている難民キャンプがある。現在ここに約1万6000人が身を寄せている。

2011年7月にキャンプを訪れ、驚いたのがその広さだ。敷地は8つの区域に分けられ、そこに避難民たちが寄り添いながら暮らしていた。キャンプ内では、食料、保健、教育など多くの分野で各国の援助団体が支援を行っている。関係者によると、「キャンプには最低限の食料はあるが夢や希望はない」、「食料はカロリー計算で支給されているため小さい子どもがいる家庭には足りない」、「母国に帰ることができ

ても行くところがないのでこのままキャンプで過ごす方がよい」など、避難民の声はさまざまである。

キャンプ滞在中、エチオピアから来たという一人の女性に出会った。彼女の名はハウア。夫のアブラハムは、自身も避難民でありながら援助団体の現地スタッフとして人々の暮らしを支えている。彼らの家には、水浴びから食事、食後のコーヒーと、精いっぱいのもてなしを受け、談笑し、昼寝までさせてもらった。その時ハウアはとてうれしそうだった。

厳しい状況にある中で、彼らの優しさや思いやり、笑顔にただ脱帽するしかなかった。ここに暮らすすべての人々が、望むような生活を送れる日が来るのを願うばかりだ。



将来的な太陽光発電の普及を目指し、調査研究センターに設置されたソーラーパネル

自然エネルギー発電の確立と 女性の生計向上を支援

海上輸送やソマリア沖海賊対策の拠点として、地政学的に重要な位置にあるジブチ。JICAは無償資金協力による太陽光発電の普及と青年海外協力隊の活動を通じた人々の生活向上を支援している。



[上] ジブチ市内の地域開発センターで、隊員からビーズストラップの作り方を習う女性
[下] 女性たちが作成したビーズストラップとシュシュ

アジア・中東とヨーロッパをつなぐ紅海の入口に位置するジブチ。海上輸送の要衝であるばかりか、特に近年はソマリア沖海賊対策の拠点としても国際社会から注目されている。

年間を通して気温が高く雨量も少ないため、国土の大部分は不毛な土地が広がり、農業は発展していない。水資源や鉱物などの地下資源にも乏しい。そのため、経済の中心は軍事拠点へのサービス業や、中継貿易地点としての港湾・物流業などの第三次産業で、それが国内総生産の約81%を占める。2005年以降、毎年約3～4%の経済成長率を達成しているものの、1日2ドル以下で生活する人が人口の約4割に上るのが現状だ。

JICAはこれまで同国の経済的・社会的発展に向け、情報通信や基礎教育分野など、生活基盤の整備を中心に無償資金協力を実施してきた。そして現在、重点支援分野には水や基礎教育などが挙げられ、エネルギーもその一つ。ジブチは電気のほとんどを隣国エチオピアから購入しており、国内では化石燃料を輸入しわずかながら火力発電を行っているが、需要の伸びに供給力が追いついていない。今後安定して電気を供

給していくためには、太陽光・地熱・風力などの自然エネルギーを利用した発電施設の建設が望まれている。そこで、JICAは2009年に無償資金協力で「太陽光を利用したクリーンエネルギー導入計画」を開始。政府系研究機関である「ジブチ調査研究センター」に太陽光パネルを含む発電機材を設置し、今後、同センターがジブチの太陽光発電の普及に取り組む拠点になるよう、これらの維持・管理技術を伝えるための研修を実施している。

一方、青年海外協力隊の派遣や研修員受入といった技術協力も行っている。青年海外協力隊は、現在、植林、野菜栽培、小学校教諭、幼稚園教諭、村落開発普及員、青少年活動、コンピュータ技術、自動車整備の分野で26人が活動中だ。

中でも注目されているのが、紛争や干ばつなどの影響でソマリアやエチオピアから避難してきた人々が暮らすアリアデ難民キャンプでの活動だ。同キャンプで難民支援を行う現地NGO「家族保護協会」に協力隊員が派遣され、子ども向けに劇や紙芝居などのレクリエーションを実施しているほか、シングルマザーなど生活が苦しい女性を対象にした「おみやげプロジェクト」を2010年から

開始している。これはジブチ男性の伝統衣装「フータ」に使われる生地で作った財布や、ジブチと日本の国旗が入った布製キーホルダーなどの制作を女性たちに指導するプロジェクトで、生計向上のため隊員が発案。ジブチを行き来する日本人などにおみやげとして購入してもらえるようになった。当初16人で始めたプロジェクトも参加人数が増え、売上も大幅に伸びた。この成果を受け、現在はキャンプ内に協同組合を設立して活動を継続している。

この「おみやげプロジェクト」は広がりを見せ、首都ジブチ市でも実施中。街で売られているお土産のほとんどが近隣国のケニアやエチオピアで作られジブチ産でないことから、文化教室やスポーツなどコミュニティ活動の場として区ごとに設置されている「地域開発センター」で、隊員がビーズ細工や裁縫などを指導しているのだ。現在は、ジブチ女性の伝統服「ブーブ」に使われるカラフルな生地で作ったシュシュやポーチ、ビーズの携帯ストラップなどを作ることで、女性たちの生計向上を図ろうとしている。今後は品質や売上の管理も女性たち自身が自立的に行えるよう、販路の拡大も含め運営方法の確立などにも取り組む計画だ。



[左] アリアデ難民キャンプで、レクリエーションの一環で劇を行うため、子どもたちと歌を練習する隊員たち
[右] 難民キャンプで暮らす女性たちに小物の制作を指導し、生計向上につなげる